

〈特別寄稿〉

志賀施設の思い出

渡 辺 隆 一

志賀施設に訪れたのは私が東京都立大学生物学科の3年生、1967年の夏休みだったと思う。IBPの亜高山森林生態系の調査地であったおたの申す平での調査の手伝いとして北沢先生に連れられてきた時である。宿はたしかゴロベイ旅館で、信州大学教育学部の施設は今のロックガーデンの下段に山小屋然としていた。水は長池の水を沸かして使っていると聞き驚いた。1時間ほど歩いておたの申すの原生林に入り土を採集し、施設に今も残る実験室に持ち帰りツルグレン装置にかけて土壤動物を抽出するので数日間は滞在したのだと思う。北沢先生には土壤動物の調査で北海道や鳥海山、飯山の黒岩山など日本各地に連れていってもらい本当に感謝している。でも、志賀高原は一度きりでしたのでおたの申す平の針葉樹の原生林は印象的でよく覚えているのですが志賀施設や当時のスタッフについてはあまり記憶がありません。学生でもあり特に関係者への挨拶などがなかったからかもしれません。

1976年も暮れに志賀施設で自然観察指導もできる植物生態学の研究者を募集しているのを見かけ応募しました。夏にしか来たことがなかったので雪に埋もれた志賀高原を見たくて応募書類を信州大学教育学部に直接持参し、志賀施設に泊めてもらえるようお願いしました。1月も末の冬の施設は森も施設もすっかり雪に埋もれていて、房総丘陵の暖帯林で調査をおこなっていた目にはまったく違った世界であり、とても新鮮でした。そして今でも覚えているのは窓ガラスにみごとに発達した窓霜です。窓のあちこちに大小様々に湾曲して羽毛状に伸び発達した窓霜は朝日にきらきら輝いて冬の寒さの芸術だといたく感動しました。そんな初めての世界を味わいたくて翌日は歩いて帰りますと無茶をしたものです、一沼を過ぎたあたりで配達業者の車に拾ってもらい湯田中まで送ってもらいました。幸いにも採用されてその4月から志賀施設に勤めることになりましたが応募の時の最初の酷寒体験は今でもはっきりと覚えています。

大学院の博士課程からは、植物の季節変化を、それまでの土壤動物の生態研究での生活史の視点から見直す研究を始めており、千葉県、房総丘陵の500

種ほどの暖帯性樹木を対象に通年の調査をおこなっていました。そこから標高1600mの志賀高原に赴任したので、暖帯から暖温帯を飛び越していきなり冷温帯にきたものだから、さて見たところ房総で調査してきた種類が一つも見当たらない。狭い日本といえどもこれには自然の広さや今でいう生物多様性を本当に実感させられた。後になればいくつかの種類は共通していることがわかったが、例えばウワミズザクラは房総では直径50cmもの立派な高木になるが志賀では高さ数mの低木にしかならないし、ニフトコも房総では5mほどになるが志賀ではほとんど地上部は枯れてしまうなど、種の生活のありようがかなり異なっていることがわかった。そうした全く異なる自然の比較を身をもって体験できたことは私の自然観に大きな力となっているだろう。

当時の志賀施設には鳥類研究者の中村登流先生と地質研究者の赤羽貞幸さん、そして植物担当の私がおり、志賀の自然についてそれぞれの分野での知見や疑問などを教えてあったり議論したりした。そしてその成果ともいえる「志賀高原の自然誌」という大判の本を出版できたのも、異なる研究分野の3人がいたからである。特に中村先生には鳥だけではなく「研究室の成果は自然に還せ、二次林での成果は原生林に還せ」と自然を見る目の大きな意味を教えていただいた。その具体的な成果が志賀施設の分園として「カヤノ平ブナ教育園」を開設するにあたってそのさらに奥地にある全くの原生林であるブナ学術参考保護林を同時に調査研究地として1979年に設定したことである。それは2010年に30年目の再計測調査がおこなわれブナ原生林の動態として確かな成果となっている。

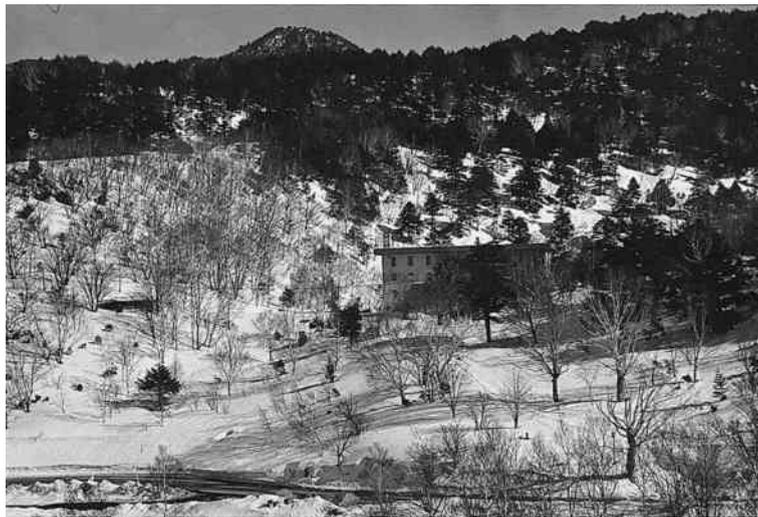
志賀施設に赴任して早や35年、目の前の長池湿原はササや低木がやや押し寄せてきているし、前景の二次林のシラカンバも大きくなったり倒木したりしているが定点写真で見ると限り大きくはその姿を変えてはいない。それよりも変わったのは調査や研究のスタイルである。赴任当時はまだパソコンが普及していなかったので様々な印刷物もガリ版だったり、和文タイプライターだったりした。気象データの気温や天気も技官の方に毎朝毎晩計測、記録していた

だいた。カヤノ平の気象計測もしたくて自記記録計を設置したがバッテリーがもたずに肝心の冬の計測ができなかった。今では安くて簡単な計測機が開発され使用できるようになった。その反面大学での業務は繁忙を極めるようになりじっくり調査したりゆっくり志賀のあちこちを歩くこともできなくなった。

そして私の積年の研究テーマである植物季節も毎日1コマの撮影ができるインターバルタイマー付のフィルムカメラから現在は東大との共同研究によるウェブカメラに代わり、どこからでもインターネット経由で施設前面の森が常時観察、記録できるようになった。私の1986年からの前景の森の定点写真もデジタル化され、ネット上に公開されている。いつ

かは志賀の過去の自然を記録した資料として温暖化などの実証にも役立つであろう。

志賀高原の自然はこれからも貴重な原生林として国立公園の特別保護地域やMABとして保護され守られるだろうし、その豊かな自然の価値はますます貴重なものとなるだろう。特に手付かずのおたの申す平の原生林の価値は世界的にもかけがえのないものとして重要性を増すであろう。それにも増してその一角に研究、教育機関として信州大学教育学部志賀施設があり続けることはこの志賀の自然の価値を一層高め、また守るうえでも今後とも必要なことであり、それを強く願っている。



吉田山からの施設遠景



施設入口 (1986年5月10日)



長池から展示館 (1986年6月6日)